

言語表現と論理的意味におけるずれ

～日本語とスペイン語の否定関連表現から

片岡 喜代子

Abstract

The aim of this work is to investigate how the interpretation of a sentence where the linguistic form and its logical meaning do not correspond completely to each other. Linguistic expressions in general consist of form and meaning, and the logical meaning of a sentence should be a composed meaning of all the meanings of all the elements that form the sentence. We thus expect that the logical meaning of a sentence would reflect all the meanings of the elements.

There, however, are some cases in which the relevant correspondence does not obtain. We present, as instances of those cases, negative indefinites and negation-related expressions in Spanish and Japanese, and show that the interpretational processes of those cases should be distinguished into, at least, two ways; one is an interpretation directly derived from the logical meaning, which is derived on the basis of the syntactic structure, and the other is one pragmatically derived making use of its discourse context. By examining those interpretational processes in detail, language-particular properties in the two languages, as well as universal properties, are captured more clearly than generally assumed.

キーワード：否定 論理的意味 推論 否定調和項目 否定極性項目

1. 導入と目的

言語表現は形式と意味がセットになった単位であり、複数の単位が合成されてより大きい単位を成す。複数の単位からなる言語表現の論理的意味は、個々の単位の意味が合成された意味となるのがあるべき姿である。従って複数の形式から成る文の論理的意味は、その形式の持つ意味から成る合成的意味に対応すると期待されるが、そのまま対応しない場合がある。本

研究では、そのような形式と意味がずれる事例を日本語とスペイン語の否定関連表現からとりあげ、その「ずれ」が如何にして起きるかを解明する。形式と意味のずれには、統語レベルでの要因によるものと語用レベルでの要因によるものがあり、それらは識別可能で、区別して捉えることで類似の現象も相違があることが明らかになる。言語個別のものとして確認できた特質が、普遍的特質と如何に関わるかを論じていく。

様々な言語には、否定との共起を要する表現が観察される（以下、否定関連表現と呼ぶ）。スペイン語の *nadie* と *un dedo* はその類の項目であり、日本語の「だれも」と「指一本」にそれぞれ対応する。（以下、例文の逐語訳は筆者による。）

- (1) a. **No vino nadie.**
not came anybody
b. **Vino nadie.*
came anybody
- (2) a. だれも来なかった。
b. *だれも来た。
- (3) a. **No movió un dedo por él.**
not moved-3rd-sg a finger for him
b. #*Movió un dedo por él.*
moved-3rd-sg a finger for him
- (4) a. (彼は／彼女は) あいつのために指一本動かさなかった。
b. # (彼は／彼女は) あいつのために指一本動かした。

(1a), (2a) は「来た人がだれもいない」状況に対応し、両者ともに否定辞なしでは適格な文を成さない。(3a), (4a) は「なにもしなかった」状況に対応する。これらの場合は、否定辞のない肯定文でも文法性は問題ないが、解釈としては「指の一本」についての文字通りの言明であって、関連する事項すべてに言及するような解釈（一般に「全称」解釈と呼ばれる）は成さない。つまり、これら *nadie* / 「だれも」、(mover) *un dedo*¹ / 「指一本」は、否定辞と共起した場合のみ「全称」の働きを持ち、すべてを否定する「全称否定」と呼ばれる解釈を導く。

このように、否定とともに全称否定解釈を導くのが、否定を必要とする

否定関連表現によく見られる特質の一つである。共通の特質を持っているスペイン語のこの二つの項目ではあるが、両者には分布における相違が認められる。また一見対応しているように見える日本語の表現とも異なりを見せる。

(1a) の *nadie* は、動詞に後続する場合は文否定辞を必要とするが、動詞に前置する場合は文否定辞は現れない。(5a, b) は論理的意味は同じで、対応する日本語文 (5c) と同様の全称否定の解釈を与える。つまり (5a) では存在している否定辞が (5b) では存在していないが、それにも拘らず文否定の解釈が成されるのである。上でも記したが、対応する日本語の「だれも」は否定辞なしでは、全称否定の解釈は導けない。

- (5) a. **No** vino *nadie*.
 b. *Nadie* vino.
 (Bosque 1980: C. 2, (1), (2)) (Zagona 2002: 4, (61b), (61a))
 c. だれも来なかった。
 d. *だれも来た。²

このような否定関連表現が生起した際の「否定辞の脱落」は、スペイン語ではよく知られたものである。言語表現がなくなっても、その表現の担っていた意味だけが残っているという意味での「ずれ」である。

ところが、すべての否定関連表現にこの「否定辞の脱落」が見られるというわけではない。(3a) の *un dedo* は同様のふるまいを見せず、動詞に前置する位置で否定辞なしで同じ意味を与えることはできない。対応する日本語もまた否定辞なしでは全称否定の解釈を導くことはできない。

- (6) a. **No** movió *un dedo* por él.
 not moved-3rd-sg a finger for him
 b. **Un dedo* movió por él. (NGLE: 48.7d-g)
 a finger moved-3rd-sg for him
 c. 指一本動かさなかった。
 d. #指一本動かした。³

この項目の場合、否定辞なしでは文否定の解釈は成さないという点では

(1a) の *nadie* とは異なるが、形式と意味が対応していないという点では、同じである。対応する日本語文 (6c) と同様、この文の解釈そのものは「指」についての言明ではない。「指」という表現を用いているが、「指」についてではなく、関連するすべてを否定する解釈を与えており、文字通りの解釈ではないという点において言語表現と意味における「ずれ」である。

以下では、それぞれの表現が与える意味解釈を詳細に記述して、否定とどのような関わりをするかを明らかにし、言語表現そのものの持つ意味とは異なる解釈が如何にして導かれるかを示す。第2節で論じるように、スペイン語の *nadie* は、言語の構造関係を反映する論理の意味から全称否定を導く。つまり統語レベルでの *nadie* と否定要素との構造関係が全称否定成立には必須である。一方、第3節で論じるように、*un dedo* は語用論的に導かれた推論に基づいて全称否定の解釈を導く項目である。それぞれ意味解釈の成立の仕方や対応する日本語表現との共通点・類似点を探り、その上で、スペイン語には音形を持たない否定要素が統語レベルで存在するという分析を支持する議論を提示し、記述的一般化からの帰結としてその存在を主張する。そのような音形を持たない否定要素は *nadie* 文では構造条件を満たす働きをするが、*un dedo* の推論解釈成立のためには働かず、明示的否定辞が語用論的推論を導入する働きを担うことを論じていく。また日本語には、同様の、音形を持たない否定辞は存在しないことも論じ、それぞれの言語の否定述部のあり方における個別特質との関連を示唆し、言語表現と意味とが対応しない場合の解釈の成立可能性を探る。

2. 否定調和項目と音形を持たない否定要素

本節では、日本語の不定表現「だれも」「なにも」に一見対応するように見えるスペイン語の *nadie* や *nada* 等不定表現について、その統語的・意味的特質を明らかにする。その記述の結果からスペイン語における音形を持たない否定要素の存在を確認し、またその存在を指示する更なる議論を提示する。その上で、日本語不定表現との相違を明らかにする。

2.1 否定調和項目としての不定表現

スペイン語の *nadie* や *nada* 等は否定環境に生起する不定表現であり、一般に *n-word* と呼ばれている (Laka 1990, Zagona 2002 など)。前節でも見たように、日本語の不定表現「だれも」「なにも」に対応するようにも

見えるが、それらの分布の相違をより詳細に以下に示す。

スペイン語平叙文では (7a, b) のように、主語名詞句は動詞に前置することも後置することも可能で、両者が発話される文脈には違いがあるものの、それらの論理的意味は同じである。

- (7) a. Juan vino.
John came 'John came.'
- b. Vino Juan.
came John 'John came.'

n-word は、主語名詞句としても目的語名詞句としても現れ、ともに動詞に前置することも後置することも可能である。ただし動詞に後置する場合は必ず文否定辞が必要であるが、動詞に前置する場合は否定辞なしで現れる ((5a, b) も同様)。否定解釈成立については同じであるので、一見、否定辞が脱落しても否定の意味を成すと見られるが、そのように単純には扱えない。

- (8) a. *(No) vino *nadie*. / *Nadie* vino.
not came-3rd-sg anybody nobody came-3rd-sg
- b. *(No) dijo *nada*. / *Nada* dijo.
not said-3rd-sg anything nothing said-3rd-sg
- (NGLE: 48.3k)

これら *n*-word の文は全称否定解釈を導き、それぞれ日本語文の (9a), (9b) に対応する。

- (9) a. だれも来なかった。
- b. (彼は／彼女は) なにも言わなかった。

つまり、いずれも不定表現と否定の組み合わせで全称否定を表しているので、それぞれの言語形式が持つ論理的意味は、否定存在量化もしくは全称量化否定で表される。従って、(8a) の論理的意味は、(10a) または (10b) である。両者はド・モルガンの法則により等価である。

- (10) a. $\neg\exists$ 否定存在量化：
 $\neg\exists x P(x)$: 述部 (Predicate) $P_1(x \text{ vino})$ を満たすよ
 うな x は存在しない。
- b. $\forall\neg$ 全称量化否定：
 $\forall x \neg P(x)$: すべての x について, NOT $P_1(x \text{ vino})$
 である。

このように解釈と分布を見ると *n*-word は, 英語不定表現の *any*- と *no*- の両方に対応している。否定辞とともに全称否定解釈を導く点においては *any*- と同様のふるまいをし, 他の否定要素と共起しても単一否定文として解釈される。しかし *any*- と同じ特質を持つのであれば, 単独で文否定を成すことは説明できない。否定辞が「省略」されて, 形式には現れないが否定力が残っているように見えるが, 省略されてはいけない場合がなぜあるか, 説明が必要である。

一方, 単独で全称否定解釈を導く点は *no*- と同じ働きをしているので, *no*- と同様, 文否定を導く否定力を持っているとすると, 単独で文否定を成すことは矛盾がない。しかしながら, 一方で他の否定要素と共起して複数の否定要素が同節中に生じた場合, 論理的には多重否定になるはずであるが, *n*-word は同節内に他の否定要素と共起しても, 単一否定文として解釈される。どちらであっても矛盾点が出るのである。

このように複数の否定要素から単一否定が導かれる現象はイタリア語等他のロマンス系言語にも見られる。特定の位置 (動詞に先行する位置) に否定要素が必ず生起する必要があることに着目して, より一般性の高い統語的過程による説明を試みたのが Haegeman1995 による否定調和 (Negative Concord) と呼ばれる統語操作である。上で見た否定現象を説明するべく, 論理的意味が導かれる意味レベルの前の段階の統語レベルにおいて, 複数の否定要素のうち一つだけを残して残りの全ての否定力を消す操作がなされているとし, その操作に構造上の特別の位置が関わっていると仮定して提案されたのが否定調和である。

本稿は否定調和の統語的操作の是非や詳細を論じるのが目的ではないので, 概略を説明するにとどめ, ここでの議論に必要な点のみ以下記す。Haegeman1995 や Haegeman & Zanuttini 1996 では, 機能範疇 Neg の指定部主要部の一致 (Spec-head agreement) により, 否定素性 (Neg-feature)

能で、複数の *n*-word は生起できない⁵。以上の分析による結果は、事実として以下の通り確認される⁶。

- (13) a. **Nada nadie* quiere. (Bosque 1980: C.2, 2.3, (82a))
 nothing nobody want-3rd-sg
 b. **Nadie no* vino. (Zagona 2002: 4, (63b))
 nobody not came-3rd-sg
 c. **Nadie nada* dijo. (Zagona 2002: 4, (63c))
 nobody nothing said-3rd-sg

音形のない否定要素があるゆえに、一対一であるためには、NCIである *n*-word が一つしか動詞の前に生起できず、また必ず一つ生起する必要がある。

以上のように Zagona 2002 等は、スペイン語 *n*-word を捉えており、ここでもこの分析に従う。

2.2 音形を持たない否定要素とさらなる否定調和項目

スペイン語には他にも *n*-word と同様の統語的ふるまいを見せる項目がある。いずれも全称否定解釈を与える。更にこれらも動詞に前置された場合は否定辞なしで全称否定を導く。従って否定調和項目 (NCI) と見なすべきで、語彙として音形を持たない否定要素が統語レベルで存在するからこそ、このような項目も可能になる。音形を持たない否定要素の存在を示す項目であると言える。

- (14) a. Tal actitud **no** se puede tolerar *en modo alguno*.
 such activity not CLI can-3rd-sg stand in way any
 ‘Such behavior, nobody can bear it in any way.’
 b. *En modo alguno* se puede tolerar tal actitud.
 (Bosque (1980: C. 2), (27a), (28a))
- (15) a. **No** he estado aquí *en {mi/la} vida*.
 not have-1st-sg been here in my/the life
 ‘I have never been here in my life.’
 b. *En {mi/la vida}* he estado aquí. (ibid., (27b), (28b))

- (16) a. **No** lo he visto *en todo el día.*
 not him have-1st-sg seen in all the day
 'All day long, I have not seen him.'
- b. *En todo el día* lo he visto.

(ibid., (27c), (28c))

これらのように否定辞なしで文否定を導く脱落現象は、否定辞の省略や消去と捉えられてきた (Cf. Bosque 1980)。ここでの議論をふまえると省略でも消去でもなく、否定要素が音形式では存在しないが、統語レベルでは存在し、文否定力を成すための働きをしているのである。

2.3 日本語の不定表現と否定辞の脱落

一方日本語には、音形を持たない、つまり形には現れないが否定の意味だけを成すような否定要素は存在しない。まず、そもそも不定表現は否定辞なしでは生起しにくい。格助詞を伴って生起したとしても、全称肯定の解釈であり、文否定にはならない。

- (17) a. だれも りんごを 食べなかった。
 b. *だれも りんごを 食べた。
 c. だれもが りんごを 食べた。

不定表現だけを含む文には否定力はなく、従って、不定表現そのものには否定力はなく否定調和項目とは異なる特質を持つ⁷。また音形のない否定要素も存在しないと言える。

否定を要求する項目で、否定辞なしで用いられ、語彙として定着している例もあるが、やはり否定力はない。

- (18) a. 昨日の試合は全然良くなかった。
 b. 昨日の試合は全然素晴らしかった。
- (19) a. 何気なく言ってしまった。
 b. 何気に言ってしまった。

(18b) は否定辞無しで単独で、元々担っていた意味と同様の解釈を与える

が、文否定にはならず、文そのものは否定力は持っていない。(19b)は、否定とともに担っていたのと同じ意味を否定辞なしで表し、既に語彙としては定着しているが、語彙レベルの問題であり文否定とは異なる。

以上のようにこの節で紹介した事例は、一見、否定辞の脱落としてスペイン語・日本語同じ類いの現象のように見えるが、全く異なっている。スペイン語には音形を持たないが統語的には働き論理的意味に関与する否定要素があり、そのような否定要素があるからこそ(14)、(15)、(16)のような項目が見られる。表面的には脱落しているように見えるが、否定要素は存在しているのである。一方日本語にはそのような否定要素は存在するとは言えない。

3. 否定極性項目と明示的否定要素

前節では、スペイン語には音形を持たない否定要素が語彙として存在し統語レベルで働くこと、そのような否定要素が存在する故に *n-word* のみならず他にも否定調和項目として働く項目の存在が可能になること、さらには日本語不定表現との違いも捉えられることを見た。しかしながらスペイン語の否定関連表現の中には、そのような音形を持たない否定要素とは関わりのない項目もある。その一つが第1節で挙げた *un dedo* であり、否定調和項目と同様のふるまいは見せない。

本節では、*un dedo* の解釈がどのようにして成立し、その意味特質が否定極性項目と呼ばれるにふさわしいものであること、またその解釈成立には明示的否定辞が必須で、音形を持たない否定要素では否定極性と称すべき解釈を確立できないことを論じる。その上で、日本語において否定極性項目とみなすべき項目との解釈成立における共通点と分布における違いも論じる。

3.1 否定極性項目とその解釈

第1節でも例を挙げたように、*un dedo* を含む否定文は「指一本動かさなかった」という日本語文に相当する。

- (20) a. **No** movió *un dedo* por él.
 not moved-3rd-sg a finger for him
- b. (彼は／彼女は) あいつのために指一本動かさなかった。

ここで着目すべきは、両者ともに「指」に言及してはいるが「指」について何らかの情報を与える文ではなく、「何もしなかった」という全称否定を意図する文であるという点である。「指」という形式を用いているが、「指」についての解釈を与えるのではない。その意味では、この事例も言語形式の持つ論理的意味からは直接導くことができない解釈である。この文は、「最低限である指の一本くらいは動かしてもよかったが、それさえせず、何もしなかった」という全てを否定する意図を伝える表現であり、その意味での全称否定解釈を与えている。

このような「最低限の事柄に言及することで関連するすべてに及ぶ効果」を与える解釈は、Fauconnier (1975) により語用論的スケール (pragmatic scale) による解釈として詳細に論じられたものである。以下スケール解釈 (scale-reading) と呼ぶ。例えば以下のような英語の最上級表現は、全称量力を持つことが可能で、日本語文と同様の解釈を与える。

- (21) a. My uncle can hear the faintest noise.
(Fauconnier (1975: (12)))
b. 私の叔父はどんな小さな音でも聞こえる。

もちろん (21a) は文字通りの解釈 (the faintest noise のみについての言明) も可能であるが、文脈によって、「最小の音が聞こえる」ということは当然「それより少し大きい音は聞こえる」というように、音の大きさに対応した「聞く」という述部の成立可能性についてのスケールが導入される。そして論理的展開があたかもそのスケール上を進むようにして、この解釈が成立すると捉えるのである。また (21) の例は肯定文であるが、このスケール解釈そのものは否定文に限ったものではなく、肯定・否定のいずれでスケール解釈が成立するかは文脈による。以下で見ていくように「un dedo / 指一本」のような最小要素表現は否定環境でのみスケールによる全称解釈を成立させる。

(20a, b) においては、un dedo / 指一本を最小要素 (minimizer) として、述部 (mover x) / (x を動かす) による肯定命題の実現可能性スケールが文脈から導入される。この実現可能性の値は、言わば人間の活動という文脈によって決められた語用論的スケールであり、そのスケールにおいて (mover un dedo) / (指を動かす) は実現可能性最大値を占める。言い

換えれば最低限のものを動かす事はもっとも実現し易いと捉え、その実現し易さを順序付けたものがスケールである。

Fauconnier (1975) は、この語用論的スケールを人間普遍の認知活動の一つとも言える推論に関連付けた。ある命題 A が成立すれば、その文脈に応じて命題 B を帰結として含意する推論は、そのスケールにおける命題 A の値から命題 B の値へのスケール上の移行と捉えたのである。述部 (mover x) / (x を動かす) による肯定命題の文脈では、そのスケールにおいては、「腕を動かす」ということが成立すれば、実現可能性がそれより大きい「指を動かす」ということは当然起こり得るというように推論は、成立可能性小から大へ進んで行く。つまり上方含意 (upward entailment) による推論となり、実現可能性最大ゆえに最上位を占めるのが「指を動かす / mover un dedo」という肯定命題である。ところがその命題が否定された「指を動かさない / NOT (mover un dedo)」は、実現可能性最大値の命題が否定されることになる。すると「指を動かさない」ということは当然「腕を動かさない」ということで、実現可能性大の命題が不成立ということは、実現可能性がより小さい命題は当然不成立として、大から小への推論となって、推論の方向が逆転してしまう。つまり上方含意が下方含意 (downward entailment) になるのである。

(22) 推論スケールに基づく全称否定解釈：

述部 (mover x) / (x を動かす) によるスケールの場合

- (i) 肯定命題 (mover un dedo)：実現可能性最大値を占める。

「指を動かす」←「腕を動かす」←「腕と足を動かす」・・・

実現可能性小の p_1 が成立すれば、実現可能性より大の p_2 も成立

(小→大への推論：上方含意)

- (ii) 否定命題 NOT (mover un dedo)：実現可能性最大値が否定される。

「指を動かさない」→「腕を動かさない」→「身体を動かさない」
→…「何もしない」

実現可能性大の p_2 が不成立なら、実現可能性小の p_1 も不成立

(大→小への推論：下方含意)

このように肯定命題による推論はスケールを上方に進む。命題 (*mover un dedo*) が成立可能性最大値を占める以上、それより上へ行きようが無く、従って推論を進めることが不可能である。ところが否定によって推論の方向が逆転したことにより、下へ行くことで推論の進行が可能になる。従って否定命題ではスケール上の最後の点まで推論が進み、結果として否定命題の全ての点に言及することで、全称否定を導く。これが Fauconnier (1975) が提示した語用論スケールによる解釈であり、否定は推論スケール上の進行の方向を逆転する働きをすると指摘している。

推論スケールの最大値を占める肯定述語「*mover un dedo* / 指一本動かす」による命題の場合、それ以上推論が進まず推論による解釈は成立しない。従ってこの肯定文の場合、解釈可能であるとしても、対応する日本語文と同様、文字通り「指を一本だけ動かした」という文になる。

- (23) *Movió un dedo por él.*
 moved-3rd-sg a finger for him
 (彼は／彼女は) あいつのために指を一本動かした。

否定文では推論の方向が逆転するので、スケールを逆方向に進むことが可能になり、順次すべての点に言及していくことになる。その結果、否定文でのみ全称解釈が生まれる。このような否定文でのみ推論スケール進行を可能にするような極点を示す最小要素表現こそが、Fauconnier (1975) や Ladusaw (1979) が指摘した本来の意味での否定極性項目 (Negative Polarity Item (NPI)) である。「*un dedo* / 指一本」はいずれも NPI と呼べるものであり、語用論的スケールによるその解釈成立過程はスペイン語・日本語に共通している。

3.2 否定極性項目の分布と特質

スペイン語の *un dedo* は NPI として働くことを見てきたが、*n-word* のような否定調和項目 (NCI) とはどのように異なるのであろうか。まず、*n-word* のように動詞に前置する位置に生起することが不可能であることは第 1 節でも記した ((6))。

- (24) **Un dedo* movió por él.
a finger moved-3rd-sg for him
(NGLE: 48.7d-g)

つまり NCI のような特質は備えておらず、音形のない否定要素があってもそれにより NPI としての働きを全うできるわけではない。(22) の(ii)に示した NOT (*mover un dedo*) のように、*un dedo* のような NPI は統語レベルのみならず意味レベルでも否定の作用域に入る必要があり、その意味に基づいて、文脈に応じた語用論的推論スケールが導かれる。

推論スケールは語用論レベルで決まるものである。音形のない Neg は統語的要素であって、語用論レベルでは働くことができない。したがって、NPI には語用論レベルでも働く明示的否定辞と必ず共起することが必要になるのである。明示的否定要素が推論の方向を逆転させ、その結果 *un dedo* のような項目が NPI として働くことを可能にしていると言える。

NPI にとって推論スケールの確立が必要条件であるとする、否定辞でなくても推論の方向を逆転させる(下方含意を導く)明示的要素があれば、NPI は容認されると期待される。実際のところ以下のような意味環境にも NPI としての *un dedo* やその他 NPI と見なすべき類似表現が生起可能であるが、その意味環境が推論の逆転を可能にするからである。

- (25) 限定節
Solo él movería un dedo por ti. (NGLE 2009: 48.6k)
only he would:move-3rd-sg a finger for you
'Only he would *lift a finger* for you.'

- (26) 条件節 (conditional)
Si tuvieras *una pizca de vergüenza*, ...
(NGLE 2009: 48.6e)
if would:have-2nd-sg a piece of shame
(Lit.) 'If you had a *piece of shame*, ...'

(27) 法的要素 (modality)

- a. Ante la **imposibilidad** de *pegar ojo*, se levantó dispuesto a ….
(NGLE 2009: 48.6d)
in:front:of the impossibility of close eye, …
Being unable to get *a wink of sleep*, he woke up to ….’
- b. Ella **prefería** que se muriera a *mover un dedo* por ayudarlo.
(NGLE 2009: 48.6r)
she preferred-3rd-sg that CLI would:die to move a finger for help:him
‘She preferred that he would die to *lift a finger* to help him.’
- c. **Me sorprende** mucho que *haya movido un dedo* por ella.
(NGLE 2009: 48.9f)
I:am:surprised much that would:have-3rd-sg lifted a finger for her
‘I am much surprised that he would have *lifted a finger* for her.’

これらはすべて下方含意の意味環境とされ、英語の対応表現でも示されているようにNPIが生起できる意味環境であると言われているが (Ladusaw (1979)), すべて推論スケール上での推論の進行が可能だからこそNPIが生起できるのである。

一方、NCIの*n*-wordはこの意味環境には現れることはできない。*n*-wordは推論スケールとは無関係であると言える。

(28) ***Solo** él haría *nada* por ti. (NGLE 2009: 48.6k)
only he would do nothing for you

n-wordには、推論スケールでなく否定調和の過程が必要で、否定調和にはかならず一つ顕在的否定要素が動詞に前置する位置を占める必要がある。推論スケールを導くような要素では、この働きは担えないのである。

一方日本語のNPIは、同様の意味環境には生起できず、NPIには明示的否定辞が必要である。

- (29) a. 限定要素 (only)
 * 太郎だけが指一本動かす。
- b. 条件節 (conditional)
 * もし太郎が指一本動かすなら, ….
- c. 法的要素 (modality)
 * 太郎が指一本動かすなんて驚きだ。

このようなスペイン語との分布の相違に関しては、これらの表現が導く意味環境の違いのみならず、それぞれの否定辞の特質と NPI そのものの特質も合わせて精査する必要がある⁸。

4. おわりに

本研究では、言語表現とその意味が一对一では対応しない例を、否定関連表現からとりあげ、統語的・意味的特質を詳細に見ることを試みた。

スペイン語において否定力を持つ不定表現の関わる現象については、否定辞の脱落現象は省略として扱われることもあるが、統語的・意味解釈的に見て行くと、日本語で見られる脱落現象とは全く異なる現象であることがわかる。まず記述的一般化からの帰結として、スペイン語には音形を持たず統語レベルでのみ働く否定要素が存在するが、日本語には存在しないことを示した。その上で音形を持たないが統語レベルで存在する否定要素によって成される文の論理的意味及びそれがそのまま反映された解釈と、統語・意味レベルからの論理的意味に加えて語用論的推論によって出て来る解釈が識別され、相違があることが示された。また語用論的推論についても、*entailment* や *implicature* (いずれも「含意」と称されることが多い) などとの関連で述べられることがあるが、その解釈成立過程を詳細に見ることで統語的ふるまいや分布の違いがより明らかになった。

ここで取り挙げた現象は、小さな事例ではあるが、否定現象を通して否定そのもののあり方における言語間の相違や、それぞれの言語の個別特質や普遍的特質を探ることへ繋がるものと期待できる。

〈謝辞〉

本稿は、スペイン語学研究会 SELE2015 (2015年8月26日於：静岡県) において口頭発表した内容を発展させたものである。スペイン語事例蒐集

には、神奈川大学言語研究センターより、2015年度に続き2016年度共同研究グループ（「スペイン語を専攻する学生のための教材研究」代表：菊田和佳子本学准教授）への研究助成としてご支援をいただいている。また本誌編集委員会には査読を経ての公刊へ至る過程でご支援をいただいた。ここに記して御礼申し上げる。

〈註〉

- 1 un dedo（指一本）を用いたこの表現は、mover（動かす）という動詞と共起するのが常であり、mover un dedoとして慣用的に扱われるが、以下では、議論のために、対応する日本語文に合わせて un dedo だけで表す。
- 2 「だれも」が肯定文で全称解釈になる場合は、「だれもが来た」のように格助詞を伴うのが一般的である。
- 3 この肯定文の場合、少し奇異には聞こえるが、通常の量化表現の解釈（「指」の一本についての記述）は可能ではある。しかしながら全称否定の解釈は不可能である。ただし、その肯定解釈の場合は「指一本を／指を一本動かした」と格助詞を伴うのが、一般的である。
- 4 この（12a）のような例の場合、IP内にある *n*-word の否定力がどのように処理されるかが問題となる。否定調和の過程の詳細は本稿では議論しないが、その場で消去され则认为ざるを得ない。
- 5 Laka（1990）などによれば、動詞に前置する位置に複数の *n*-word が生起する文は、多重否定文としては解釈可能であるが、単一否定文としては容認不可能である。
- 6 素性一致に「移動」が伴うかどうかは議論しないが、仮に顕示移動があるとすると、それは音形のない否定要素を習得可能にするために有効であると言える。音形のない否定要素があるからこそ、否定調和項目が一つだけ動詞に前置する位置を必ず占めることになる。そのような顕示移動は音形のない否定要素を語彙項目として習得可能するためにも必要であると言える。
- 7 本稿では、スペインと日本語の否定不定表現の持つ統語的特質の解明が主目的であるので、それぞれの不定表現としての意味特質については議論をしない。日本語不定表現についての更なる議論や *n*-word との違いは、片岡 2007 を参照されたい。
- 8 日本語とスペイン語の否定辞や否定述部の相違については片岡 2016 を参照されたい。

〈参考文献〉

- Bosque, Ignacio. 1980. *Sobre la Negación* (On the negation). Madrid: Ediciones Cátedra, S.A.
- Fauconnier, Gilles. 1975. "Pragmatic Scales and Logical Structure." *Linguistic Inquiry*. 6. No. 3. 353-375.
- Haegeman, Liliane. 1995. *The Syntax of Negation*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Haegeman, Liliane and Rafaela Zanuttini. 1996. "Negative Concord in West Flemish." *Parameters and Functional Heads*. Belletti, A. and L. Rizzi (eds.). New York and Oxford: Oxford University Press. 117-179.
- 片岡喜代子 2007. 「Neg を c-統御する不定語 + モ」『言語研究』第 131 号 日本言語学会 77-113.
- 片岡喜代子 2016. 「否定関連現象から見た言語間変異——否定作用域と否定述部」『言語の意味論的二元性と統辞論』片岡喜代子他編 神奈川大学言語学研究叢書 6 東京：ひつじ書房 75-110.
- Ladusaw, William A. 1979. *Polarity Sensitivity as Inherent Scope Relations*. New York and London: Garland Publishing, Inc.
- Laka, Itziar. 1990. *Negation in Syntax: On the Nature of Functional Categories and Projections*. PhD. Dissertation, MIT.
- Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española. 2009. "La Negación (The negation)." *Nueva Gramática de la Lengua Española* (NGLE). Madrid: Espasa Calpe. 3631-3715.
- Zagona, Karen. 2002. *The Syntax of Spanish*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.